

山行報告書

通算山行NO	NO・148S	報告者	堀合喜義	
年月日	'99年 3月27日(土曜日)～	年 3月28日(日曜日)		
山行名	スキー登山	天候	27/雨・28/快晴	
山名	木曾・御岳山(3,067m)			
この山のセールスポイント	御岳山の懷で、滑る醍醐味を 心ゆくまで味わう。			
コース 及び タイム	/27 下土狩8:50⇒富士経由⇒中央高速⇒御岳スキー場⇒鹿の瀬温泉14:15(泊) /28 起床2:00⇒ゲレンデ発3:15～ゲレンデ最終地点5:00～御岳頂上8:30～駐車場11:30			
標高差	△S ≙1480 ～T 3067 =1587 m	体力度	1・2・3・4・⑤・6	
	▼T ～G = m	技術度	1・2・3・4・⑤・6	
走行距離	～ = km	展望度	1・2・3・4・5・⑥	
参加者	CL	後藤隆徳 52	1ヶ月で3,000mの冬山2本。御岳の山スキーは初めてで最高	
	SL	加藤秀子 50	さすが3,000mの冬山。登りゾクゾク。下りドキドキ。心がときめいた	
		堀合喜義 50	転び疲れた山スキーと静かな温泉宿は贅沢な山行	
		小田知典 50	日本の中心の3,000mの見晴らしは素晴らしい	
		山本正昭 50	3,000mの冬山は最高だった	
1日目	悪天候で出発日、変更があった。会長宅に小田、山本、小生が集合し曇り空を眺めながらの出発となった。沼津ICから富士ICへ。そこで加藤と合流し、国道139号線、精進湖道路、中央高速道路を経て長野自動車道の塩尻ICから国道19号に入った。中央本線と奈良井川に沿って走る国道19号線、小生にとって初めてであった。低く厚い雨雲から時折ぱらつく小雨は、歴史を感じさせる山合いの家並をより一層しっとりと落ちつかせていた。鳥居峠のトンネルを越えると道路は木曾川に沿って、中央本線と共に延びていた。伊那の案内板を過ぎて、暫く進んだ所の信号機と右折車線のある三叉路交差点を右折して県道20号線に入った。山肌が迫ったカーブの連続する道を暫く進むと、右手に道路に面した広い空き地があり、その奥の山裾に木造平屋のひなびた温泉宿が見えた。			
	<p>玄関の4本ガラス引き戸の脇に『鹿の瀬温泉』と墨で書かれた木の看板が打ちつけられていた。車は今夜のテント場を探す為止まる事なく進んだ。2ヶ所のテント場を物色した後、明日の山行の為にスキー場駐車場を確認した。時間的にテントを張るのは早いので、先程の『鹿の瀬温泉』で一服する事となった。宿の玄関には土間、上がり縁があり一段上がった廊下は赤色カーペットが敷かれて正面奥に延びていた。左手の受け付け室はカウンターで間仕切りされ、室内にはストーブと机がキッチンと座っている。カウンター上の閲覧本や御土産物、宿帳等は客が少ないのだろう。ひなびて淋しそうであった。受け付け室の前には、応接用のソファとテーブルがあり壁には見た事のある女優が、投宿した際に撮った写真であろう一枚掛かっていた。テーブル上の生け花の方が写真の女優より優ってみえた。右手の廊下は2つの客室に繋がっていた。廊下は全体的に薄暗いか壁に掛けられた淡黄色の電灯が、湿潤で落ちついた趣をだして</p>			

いた。温泉は宿の隅に位置していた。透明の温泉で湯船は6畳間位の広さで、壁側に岩が人口的に積み重ねられ岩肌を一筋の冷水が湯船に注いでいた。湯船の角にパイプがあり、間欠泉のように一定の間隔でブーンという音と共に温泉が吹き出していた。脱衣場に温泉の効用が書かれていたが、理屈抜きに入りたかったので読まなかった。入浴料は450円であった。食堂に入りビール、日本酒を注文し一服する事となった。髪を後に結んだ小柄で彫りの深い色白の角ばった顔に大きな目が印象的な中年女性が、注文の品を盆にのせて食堂に入ってきた。先程の女優の写真と一緒に写っていた女性と直ぐ判りこの宿の女将と推察した。彼女は柔らかい表情に丁寧な言葉で注文の品を卓上に並べた。一服が二、三、四服となり宿前の空き地にテントが張れないかとの交渉に入り、やがてそれが素泊まりとなり、結局2,000円で寝袋の素泊まりとなった。加藤の優れた交渉能力と女将の親切な応対に感服した。宿泊まりとなった事から一同腰が座って実に酒がすすんだ。山談義で時間を忘れた。女将の案内で10畳和室に導かれた。ストーブがあったが使わずにコタツに足を入れ山談義が続いた。満タンの腹を抱えて寝袋に潜った。

## 二日目

午前2時、室内の電灯がついて寝袋から身を起こす。廊下には昨夜、女将が湯を満たしてくれた3個のポットがならべてあった。すぐ朝食に移る。昨夜食べすぎて腹は空いていなかったが無理に詰めた。身支度をして宿を出た。空を見上げたが星は見えなかった。スキー場駐車場には既にかかなりの車が止まっていた。便所の黄色の灯が雪を照らしている場所からゲレンデに入った。山のスキーの装備でゲレンデの凍った雪面を進んだ。辺りは暗く、薄い霧が漂っていた。夜空に星を探すも発見できなかった。

5人一列で黙々と登った。途中ゲレンデから林道に入った辺りで空を見上げた所、雲間に星明りを見つけた。雲海の上に出て、山容、木々の形がハッキリしてきた。林道はカーブが繰り返され続きゲレンデから遠のいた。暫く進むと圧雪車の音が聞こえ、ゲレンデの外灯の光が見え隠れしてきた。更に進んだ所で林道とゲレンデが交わった。圧雪車はゲレンデの雪面をならしていた。ゲレンデを登り、ゲレンデの最終点で夜が明けてきた。一服して茶を飲んだ。

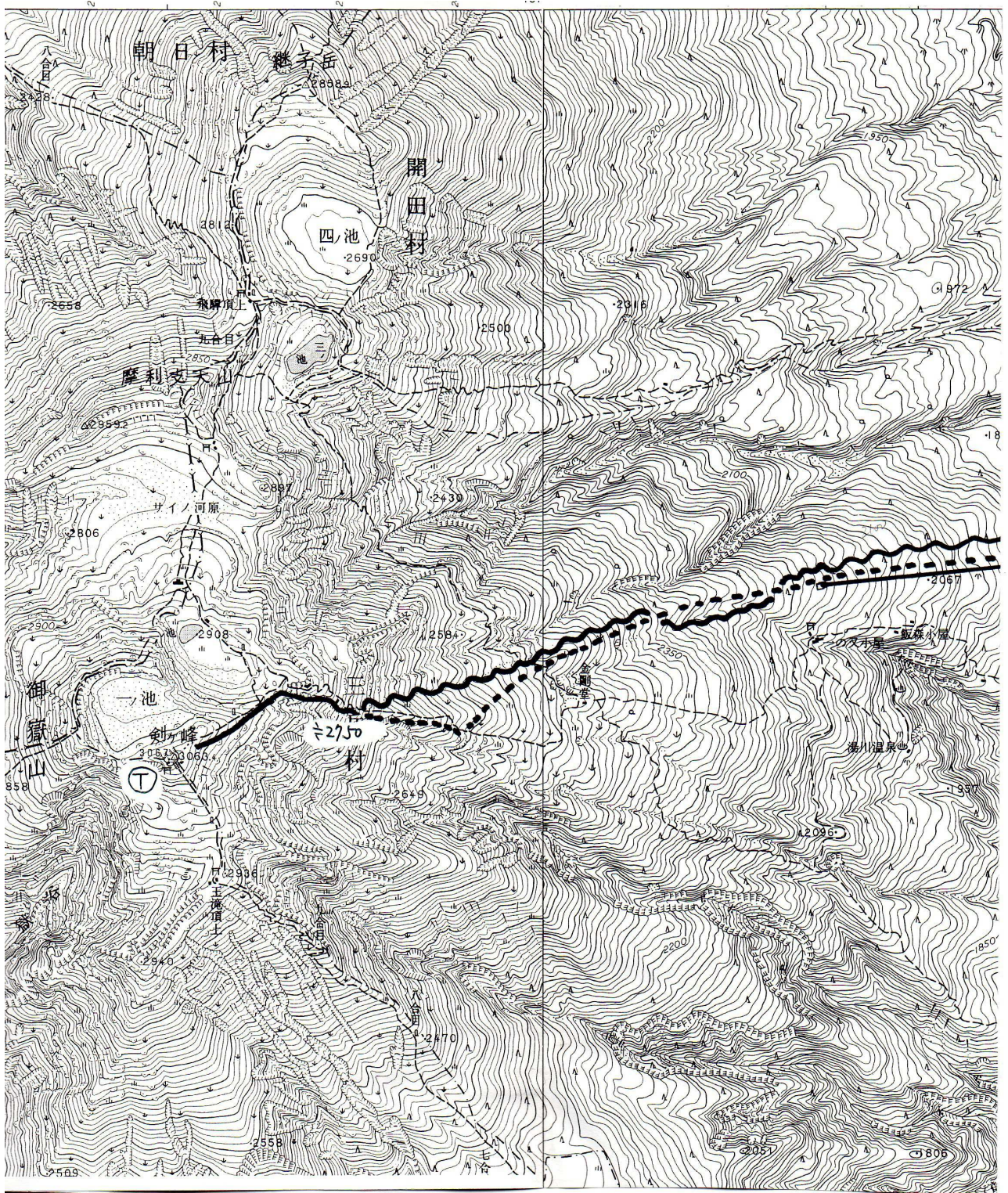
遠くの山脈が墨色から青色、そして薄い赤色に静かに変化した。早春の曙は素晴らしい。今日も天気にも恵まれた自然の山中で生き生きと遊べると思うと心が踊った。シラビソ林の中に入った。雪面には幾筋ものスキー跡があったが道はなく迷いそうであった。登るにつれて林相が変わり御岳山頂の見える辺りでは一面の雪に、所々這い松が飛び出していた。その頃、復調が悪くなり大キジをしたが、復調には至らなかった。8合からスキーを捨てアイゼンで歩く。山頂までは、かなりの急勾配が何カ所かあった。注意して足を運んだ。

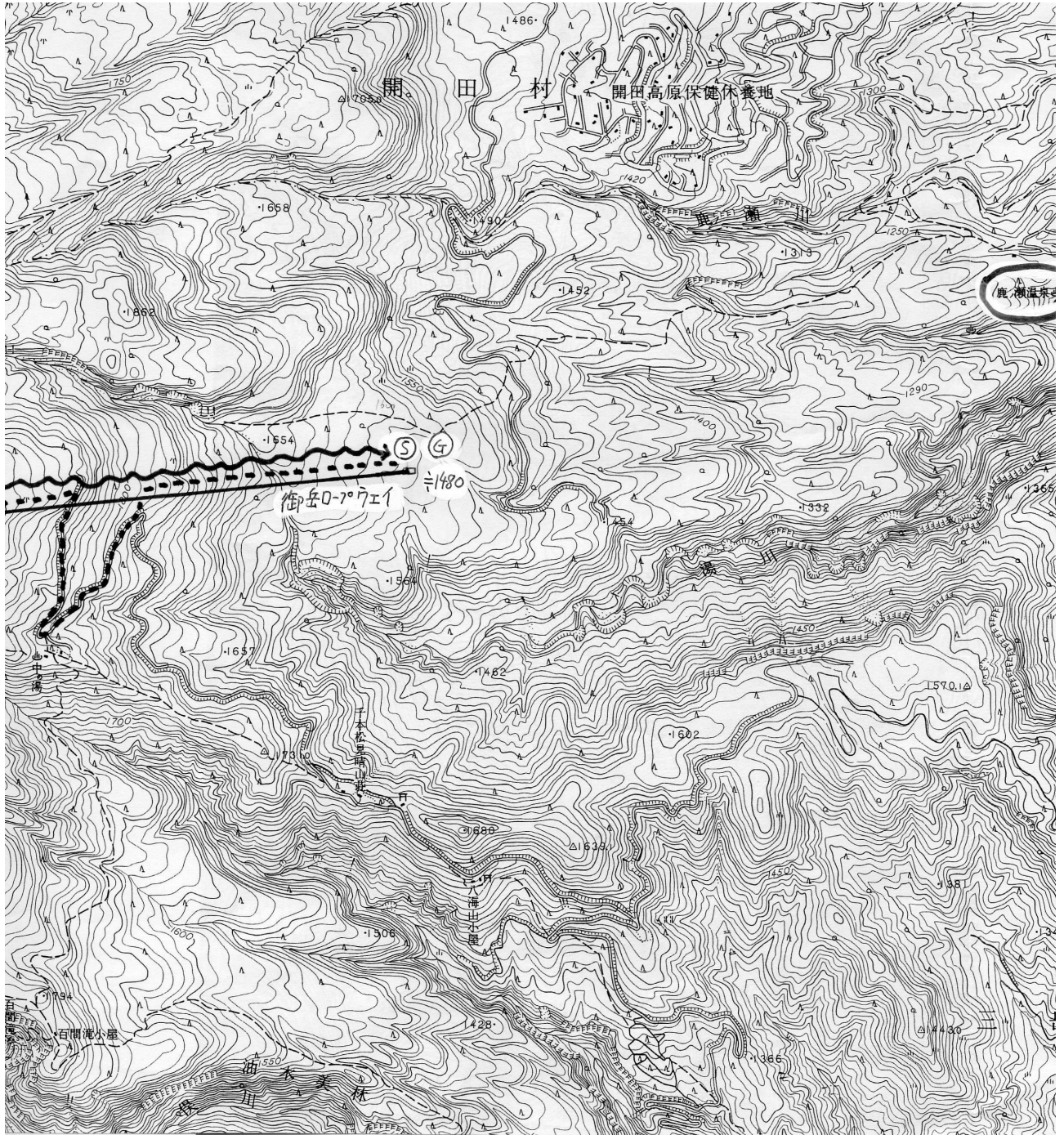
### 《ここから加ト一記》

沢をトラバースして尾根道に出ると、7合目上の霊人像の前に出た。人と見間違える程の大きさで、あまり気持の良いものではないがさすが信仰の山という感じだ。正面左手には御岳最高峰の剣ヶ峰がドーンと座し、行く手は垂直の雪壁の上に御岳頂上小屋が雪に埋もれている。少し登った8合下の標高約2,750mの岩の陰に板とザックをデポ。スキー靴にアイゼンを履かせ、此処から本格的な登攀だ。富士山9合目のような急傾斜のバーンが続く。そのきつい登りをしっかりピッケル突いて、蹴り足、蹴り足とジグザグ登行しながら、『滑ったら終わりだぞ!』

新山と北の十ヶ所 (中)  
山頂 新山 北の十ヶ所 (田)







CLの掛け声に全神経をピンと張り詰める。小屋直下の雪壁はまるで衝立を登るようだ。ピッケルの頭を握み拳骨にして雪の中に食い込ませ、それを支えに足を壁に蹴り込む。そうして梯子を登る要領で、四つん這いではい上る。緊張の連続に雪山の厳しさを痛感した。

小屋を抜け、尾根に出ると風当たりが強い。雪面には風紋はなく、カリカリの氷状で丸い粒がプツプツしている。右下に凍った二ノ池を眺め、岩塊をひと登りで御岳山神社奥宮のある剣ヶ峰の頂上だ。鳥居から垂れ下がる氷柱（つら）が透明でキラキラと光っていたのがとても印象深い。思わず口にしてみる。乾いた喉が忽ち潤う。その向こうにはつらつらとアルプスの山々が連座し、皆同定に忙しい。今年3,000mの雪山2回制覇のCLと堀合はお互いの健闘を讃え合っていた。何か静かだ。周りの空気が一瞬止まったような気さえする。これまでの疲れも吹っ飛び、3,000mの雪山にいる事すら忘れ、心の中に穏やかなひと時が流れた。

至極の時は過ぎ、下山はスキーをデポした所まで一気に戻り、此処から滑降の準備に入る。独立峰の山筋は綺麗な流線を描き、腕ならず足があればワクワク胸が高鳴る所だが、残念な事に私の心臓は心配でドキドキし始めた。滑り出しに躊躇している3人を尻目に先ずCLが滑り出す。それを見て小田が続く。山本、加藤、堀合が後を追う。雪質はクラストし、ターンするたび板がズルズル流れてしまい、板と雪面が馴染まない。

突然『おい。止めろ。板を担いでこい。止めろー！』CLの切羽詰まった声が耳に入った。小田・山本も『大丈夫かぁ〜』と口々に叫んでいる。何事が起きたのかと、慌ててその方向を見ると堀合が途中の岩の後ろでモゾモゾ動いているのが見えた。どうやら転んで岩にぶつかったらしい。急傾斜のアイスバーンは堀合には未だ少し早いと、CLが心配して歩いて来いと言っていたのだ。が、当の本人はケロケロして起き上がると、何時ものザ・ド・ボーゲンで足を踏ん張り滑りだした。大事には至らなくて、皆も『ホッ』と一安心。

沢を抜け、森林限界の地点で一休み。先に下りてきたCLが、開口一番『レイホーも遂に此処まで来れたか。今日は本当にそう思ったね。嬉しかった』と喜びの表情が隠しきれない。後から右に左に5人が、列になって軽快に滑る姿を見て嬉しくなったそうだ。『イエ〜イ！』すかさず小田の例のガッツポーズ。此処からは一旦沢に下りて、又上り返し樹林帯の中に入る。雪は丁度よい具合に腐り出し、障害物を抜ける要領でくねくねと自由自在に板を操る。最高の気分だ。大きな広い一枚バーンをジグザグにターンしながら滑るのも楽しいが、林の中を抜けるのも自分が野性の動物にでもなったような気分が面白い。冒険心を心ゆくまで満たしてくれた。時折、堀合が木に遊ばれているらしく、『大丈夫？』の問いに自棄糞の返答が返ってきた。大分疲れているらしい。リフト終点地点に下りてきた時には、みるからにヨレヨレだった。マッ、然し、堀合の根性は仕事柄か、性格からなのか凄い奴。レイホーに先があり。そう思った今回の山行だった。

#### 《堀合 記》

リフト終点地点に下りてきた時には、足がパンパンに張って、力が入らない状態になってしまった。それでも何とか滑って駐車場に着いた。帰り途中、再び『鹿の瀬温泉』に入り、食堂で一服した。加藤が窓越しに福寿草を見つけた。外に出てみると黄色の可憐な花だった。

[活動] 的な山スキーと [静] [湿] の宿を味わった贅沢な山行であった。



Улсын төв засгийн захиралын газар  
Утасны хэлтэс



雪の日は  
雪の日は  
雪の日は  
雪の日は  
雪の日は

パパの滑り (小田撮影)